

山本健吉俳句読本

角川文化振興財団編

第一卷

俳句とは何か

角川書店

本健吉俳句読本

句とは何か

角川書店



山本健吉俳句読本 第一巻

俳句とは何か

平成五年五月十日 初版発行

著者 山本健吉

発行者 角川春樹

発行所 株式会社角川書店

〒一〇二 東京都千代田区富士見二一三―三

(〇三) 三八一七―八五二一 (営業)

(〇三) 三八一七―八五七一 (編集)

振替 東京三―一九五二〇八

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

© Printed in Japan ISBN4-04-850901-2 C0395

目次

I

挨拶と滑稽	8
一、時間性の抹殺	8
二、物の本情	19
三、時雨の伝統	30
四、古池の季節	38
五、談笑の場	47
俳句の方法	56
写生について	58
純粹俳句——写生から寓意へ	61
ディアローグの藝術	82
「かな」についての月並的考察	86

「や」についての考察	91
------------	----

旅について	95
-------	----

挨拶ということ	101
---------	-----

II

俳句の世界	108
-------	-----

座の文学	138
------	-----

芭蕉と現代	158
-------	-----

「行きて帰る心の味ひ」——俳句における二律背反	167
-------------------------	-----

日本文学と季節感	180
----------	-----

季の詞——この秩序の世界	192
--------------	-----

III

子規と虚子	220
-------	-----

重い俳句軽い俳句	226
----------	-----

「俳」と「詩」と……………230

「俳」の世界……………235

ウィットといのちと……………237

アメリカでの俳句……………240

俳句と私……………244

挨拶・滑稽・即興……………244

風生最晩年の句……………246

遊女哥川の句……………248

蕉門作家五人……………250

「新しい俳句の課題」前後……………254

IV

女流俳句について……………258

女流俳句の歴史……………258

中村汀女とその先輩俳人……………265

星野立子と橋本多佳子……………273

三橋鷹女、その他 281

一句鑑賞 291

「鶏頭の十四五本もありぬべし」(子規) 291

「帚木に影といふものありにけり」(虚子) 297

「芋の露連山影を正しうす」(蛇笏) 300

「蟾蜍長子家去る由もなし」(草田男) 302

「バスを待ち大路の春をうたがはず」(波郷) 304

「寒雷やびりりびりと真夜の玻璃」(楸邨) 306

解説 川崎展宏 308

解題 317

俳句とは何か

山本健吉俳句読本 第一卷

I

挨拶と滑稽

一、時間性の抹殺

何と言つても僕は年若い俳人たちとの気の置けない付き合いから、極く自然に俳諧と言うものを学んで来たようである。僕の俳句への理解も、言ってみれば、草田男・楸邨・波郷氏等が独自の世界と風格とを形成しつつあったのと、ほぼ歩みを合せて、成熟して行つたのだ。

そういう付き合いの機会が与えられたという意味から言つて、僕が暫くでも俳句雑誌に関係していたことを感謝していいのである。僕は何時か片言隻句へんげんせきくでも心と心との通じ合う数人の雅友を拵こしらえていた。風雅とか花鳥風月とかいう言葉で現わされる藝道の特殊な部門の雰囲気を経験した僕も、僕等の身について啓発されたとか、氏等の作品によって悟入したとか言おうとするのではない。氏等との交渉の上には、濛濛もももの雰囲気から自ずと体悟したことを言いたいのだ。手っ取り早く言えば、俳句とは付き合いだ。

俳句がわかるためには、よく言われるように自分で作ってみるという専門的な修練を必要とするのであるが、そういう垣が僕の前には何時の間にかはずされて、自分は作らないながらにその藝苑に出這入りすることの出来る自由さと大胆さとを身に付けるに到ったのだ。読者がそのまま作者であるこの世界の、僕如きは変り種であるかも知れぬ。門前の小僧が習わぬ経文を誦むのに似ていると言えようか。

だが門前の小僧たるからには、毎日聞えて来る経文読誦の単調な繰返しが、何時か堪え難く耳についてしまっている筈である。僕も毎月のように何百何千という俳句を読まされ、寝ても覚めても「俳」という字が生活についてまわっていた間は、俳書と言えば手に取上げてみる気もしなかった。僕の書架は久しい間俳書だけを欠いていたし、人にもあからさまにこの俳句臭の厭わしさを口にしたのである。言わば僕はあの菓子屋の小僧と同じ修行をしたのだ。住込んだ当座、手当り次第にいろんな菓子を撮み食いする小僧の所作を、主人は見えて見ぬふりしている。何時か彼が、どんなおいしそうな菓子を見ても振向きもしなくなる時期が必ず来ることを、経験から主人は確実に知っているからである。そしてその時、小僧は菓子職人としての真の資格を獲るのである。どれくらい「もの」の堆積——これは「もの」から思想を摺む最も確実な道である。そして思想に至る道には近道などというものは無いのである。僕は俳句びたしになり、自然と俳句をそらんじ、俳句を厭い、俳句から逃れた。このような稀有の体験は、人を決して作者にはしないであろう。作者は自然の横溢おちいの中に在るべきであつて、新鮮な印象を摺むためには、心は白紙であるに越したことはない。だが俳句を作らない僕が、作らざる者語るべからずという掟が暗黙のうちに強く支配している俳句について語る資格を幾らかでも

与えられたとすれば、それはかの厭うべき俳句のマッスの賜に外ならぬ。僕に取ってはこのもつとも唯物的な道が、もつとも不可思議に参入する道でもあった。

臭いがすっかり去ったのは、雑誌から離れて一年ほど経ってからである。僕は芭蕉や蕪村の句集を再び手に取ることが多くなり、七部集は枕頭の書の一つになった。厭わしいものが心の堰を切つて反動的に好ましいものとなる力の大きさ。曾良や杜国や荷兮や凡兆や水草や言水・来山・太祇・几董、また化政の月並俳人に到るまで、一人一人が懐しいマイナー・ポエトとして回想されるのである。

「よもすがら秋風きくや裏の山」——曾良のこの名吟が僕の深い感動を喚起したのは、昔『奥の細道』を通読した時ではなかった。戦塵を遁れて出雲路の一榊刹の本堂に佗住居していたおり、季節は違うがすぐうしろの小高い雑木山に風音を聞いて、ふと口誦むともなしに口誦んだとき味わった驚愕であった。短歌、ことに俳句のような短詩型は、記憶され口誦まれることによつてのみ存在する甲斐があると言うものだ。誰にも想い出されない名吟というものは元来無意味である。

厭うべき俳句のマッスが、僕におのずから明らかにしてくれたものは、俳句固有の方法についてであった。言わば俳句のテオリイについてであった。それは次の三つの命題の上に成立する。一、俳句は滑稽なり。二、俳句は挨拶なり。三、俳句は即興なり。こう箇条的に列举してしまえば身も蓋もないし、箇条的な列举は決してものの真実を衝き得るものではない。だが僕にとってはこの三つのことは一つの確信、あの膨大な俳句の堆積が僕に強いた一つの確信に繋がっていた。

考えてみると新興俳句というものは、俳句の本当の性格を見据えるためにはいい試験台だった。それは正風確立直前にある燎原の火のように拡がった談林調の傍若無人が、真の俳諧発見への必然的な

段階であつたのと似ている。新興俳句が俳壇の懶惰^{らんだ}の夢を打破つたことは事実だが、彼等の意図したものは一つとして本来の俳句ではなかつたのである。無季俳句の容認とか、連作俳句の提唱とか、や・かなの忌避^{きひ}とか、要するにこれらの末節的拘泥の根柢に横たわるものは、和歌や詩の持っているような形での抒情性・詠歎性への羨望なのだ。「情、中に動いて形に言はれ、之を言ひて足らず、故に之を嗟嘆す。之を嗟嘆して足らず、故に之を永歌す。之を永歌して足らず、手の舞ひ足の踏むを知らざるなり。」これは『詩序』の言葉である。永歌といい、永言といい、詠歎といい、結局古人も詩歌の持つ時間性への洞察をすでに持っていたことを示している。言を永うするとは、とりも直さず詩が存在様式として時間の法則に従い、時間的な律動の上に載っていることを示している。詩歌の根源には嗟嘆がある。萬葉語の使用や、結句字余りの試みや、動詞の使用過度や、秋誓二子を先頭とする新興俳句は、身近なところにアララギ派の萬葉調短歌運動の成功を目安に置いていた。

藝術のあらゆるジャンルは他のジャンルを羨望し模倣するに至るとき、固有の力を失うのである。俳句もまた小なりといえども、いや、小なればなおさらのこと、自己に固有な厳しい方法を持っているはずであり、そのもののうちにこそ自立する重みと力とが求められねばならなかつたのである。俳句が短歌などと異なる所以のものは、単なる音数の長さではない。短歌と詩との差異はまだ量的なものであるが、短歌と俳句との差異は明らかに質的なものである。そのことは、かつて俳壇の一部に、俳句性とは要するに音数の長さであるという主張が行われ、それが無季俳句への有力な理論的支柱となつたことがあるから、とくにここに言つて置きたい。極言すれば、俳句は音数の長さを持たぬ詩なのだ。三十一音が十七音となるまでの間に、時間性の抹殺という暴力的飛躍が遂行されたのだ。それ

はもはや、時間の法則に従わぬということ、存在様式としての時間性を有せぬということ、永歌でも永言でも詠歎でも嗟嘆でもないということ、すなわち詩たるべき条件を具備しないということのうちに、固有の方法が胚胎する。そしてこれは誰しも俳句の鑑賞にあたつて、暗黙のうちに取っているところの方法なのである。

「古池や蛙飛込む水の音」——この句を始めて聞かされた時、誰しも何か会得の微笑といったものを洩らしたことであらう。今日僕等の俳句についての理解は、すべて古池の理解に始まるのである。古池の句から僕等が始めてある感銘を受けた瞬間、僕等は疑いもなくこれが俳句だという認識に到達したはずなのである。芭蕉の最傑作というわけでもないこの一句が古来あれほどまでに喧伝けんでんされたのは、それが俳句の典型的な性格を具現しており、俳句についての初歩的な、だがもつとも根柢的な認識に、それが万人を導いたからである。そこからきいた風な生半可な俗論が数限りもなく現われたのも事実である。だがこの句を知らぬ間は、僕等にとって俳句とは、十七音でありさえすれば月並でも川柳でも雑俳でも構わなかつたのである。だが僕等は古池の句に始めて俳句に対する会得の微笑を経験するのだ。俳句開眼である。古池の句が口から口へ伝えられて行くとともに、会得の微笑は圈を拡げて行く。そして今日のように津々浦々にまで俳句作りが充満するに至る。この会得の微笑を解明することによって、おそらく俳句の根本性格は説明し尽されるだらう。だが本当に誰もそんなことをやった者はいない。寂さびとか朧おろとか俳味とかいろいろに言つてみたが、結局それは模糊たるままに止まつた。とはいえ、大衆は直感的に俳句固有の性格をちゃんと掴んでゐるのだ。

床屋の宗匠でも、俳句は和歌のように詠み出ずるものではなく、ひねるものだといひ得ている。「古

池や蛙飛込む水の音」と一度終りまで誦してみてもう一度低吟を繰返し、頭の中でイメージの整理綜合を試みる。そしてやや時を置いて、おもむろに成程と頷き、にやりと会得の微笑を洩らすのだ。つまりうまくひねってあるというわけなのだ。僕は何も俳句を軽蔑してこんなことを言うのではない。だが大衆の間における俳句流布の旺盛な力は、結局このひねりの解読に伴う会得の微笑の感染性に在るのだと思っている。俳句と川柳との間の性格の微妙な相違のもとづくところもここに在る。「鶏頭の十四五本もありぬべし」子規、「帚木に影といふものありにけり」虚子——これら淡々たる一刷毛の叙述の中に湛えられた無限の味わいを見落さぬがよい。これらの小さな詩型にこめられた意欲は、疑いもなくある一つの認識を目指している。もちろんこれは体験による直観的な真実の把握ではあるが、とにかく感情よりも思惟の力に多く訴えるものであることに変わりはない。俳句は宇宙の万象に対する確な認識が含まれることを理想としている。鶏頭は「十四五本もありぬべし」といった具合に生えるものなのである。帚木は「影といふものありにけり」といった具合に立っているものなのである。ついでに言えば、この帚木の句は「帚木のありとは見えて」の古歌がつくった長い伝統を負って立っている。ものの実体をよく捉えた伝説というものは在るのだ。尋ねよれば見失うという朦朧たる存在が影を持つ、その物自体よりも影の方がより実在的であるという不思議さ——その驚きがこの句の生命である。これに反して、鶏頭の句は、そのあまりにも平凡なぶざまな在りようが、そしてその平凡さ・ぶざまさこそそのものの宿命に外ならぬという発見が、作者の深い共鳴を喚起している。ともに作品のレアリテを支えるものは、外界ではなく、外界に触れて発する作者の側の発見の驚異だ。俳句はある新しい真実の発見を目指しているのであって、その意味から陳腐や月並がもつとも厭われ

るのである。「俳句は哲学だ」という横光氏の言葉、「和歌は煩惱を詠ひ、俳句は悟りを詠ふ」という虚子氏の言葉は、このような俳句の性格に対する洞察を含んでいるものと思われる。

低吟を二度繰返すという、俳句鑑賞にあたって僕等が取る自然の強制は、一体何を物語るものだろうか。この特異性は人の注意をよく惹くと見えて、かつて誓子氏が書いていたのを見たことがあり、また美学者大西克礼氏は、その『風雅論』の中で、俳句の観照性は二重の層をなして僕等の意識に伝えられる傾向があると言っている。僕はこのような不趣味な談義をここで展開して行きたくはない。対象が俳句というそういった不趣味さをもっとも忌むところの文藝なのだから。だが乗りかかった舟で一こと言つて見ようなら、それは十七音の言葉の連続が必然的に担わされた形式の時間性を抹殺して、おのおのの言葉を同時に現前させようとする試みとでも言えるだろうか。「古池や」と、「水の音」とが、この世界では同時に存在しなければならぬのである。様式における時間性と内面における同時性とは、無限に摩擦し相剋して、ここに俳句的な性格の確立を見るのである。「遅き日のつもりて遠き昔かな」（無村）のごとき長い時間を含んでいるではないかという愚問には答えぬことにしよう。僕は何も俳句が一定の時間的推移を含む素材を詠むに適しないとも、俳句は瞬間的な映像を捉えるに適してるとも言つてやしないのだから。それは素材内容に関したことはない。ただいったん十七音の様式に定着してそこに俳句的イメージを形成するや否や、その様式の時間性は失われる、または失われようとする。つまり「遅き日」と「昔かな」との間に時間の流れが停止するのである。これは抒情詩・叙事詩・劇詩等およそ詩と名の付くものの有する根本的性格と相反するのだ。すなわちそれは詩たることを止める、または止めようとする。俳句朗吟や俳句作曲の愚かしさはすでに試験